

# 学力向上に関する学校経営等の取組

平成27年6月26日

高知県教育委員会



## 秋田県と福井県の学力を支えている主な取組

	秋田県	福井県
<b>組織・研究</b>	<p>○ 校長のリーダーシップが明確に発揮され、自校の授業改善による教員の授業力向上と児童生徒の学力向上に関わるビジョン、ビジョンの実現につなげる具体的な取組の姿を明示</p> <p>○ 指導主事を招聘した校内研究授業を積極的に実施するとともに、校内の全教員が年間に少なくとも1回は研究授業を実施する体制の学校がほとんど</p>	
	<p>(具体例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研修は、校種・教科・学年を超えて行われる体制</li> <li>・授業検討もグループ討議やKJ法などの工夫を実施。特に研究授業までの事前検討会が充実</li> </ul>	<p>(具体例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校の教科担任は「タテ持ち」が当たり前。同僚性も自然に育つ</li> <li>・学年会、教科会が週に1時間、時間割に設定されており、授業の進捗状況や扱う課題について確実に話し合われる体制</li> <li>・「一人一授業」と題し、教科・年齢に関係なく6～8人のグループをつくり、グループ内で指導案の検討、研究授業等を行う体制</li> <li>・小・中学校が協働して授業研究を実施する機会も多い</li> </ul>
<b>学習指導</b>	<p>○ 学力向上に効果的な指導法をほぼ全員が共通して、かつ一貫して継続的に徹底的にやり抜く体制（教員間の授業力のレベル差が小さい）</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>自分の考えを文章にして書かせる指導や、自分の考えを前に出て発表させる機会を多く設定。両県を比較すると、福井県よりも秋田県の方が、話し合い活動や発表活動を多く取り入れているようである</p> </div>	
	<p>○ 宿題だけでなく、子どもたちが主体的に取り組む自主学習を毎日行うように奨励</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>内容は、漢字の書き取りや計算練習、ことわざ調べなどの基礎的なものが多いが、子どもたちが自分で分量や領域を決定して取り組むよう指導。教員はやらせっぱなしにならないように、毎日、宿題と家庭学習のノート点検を実施</p> </div>	
	<p>○ 「自分なりの分かり直し」としての学習内容の再構成、再整理を含むノート指導が充実（ノートが自分なりの参考書となるよう指導）</p>	
	<p>(具体例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・B（活用）問題対応の授業を十数年くらい前から行い、その中で表現力・判断力・思考力を身につけさせている</li> <li>・児童生徒の発言、話し合い、振り返りの時間等を授業の中で確実に確保するためのルールがつけられている</li> </ul>	<p>(具体例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・A（知識）問題対応に時間をかける中で底辺を広げ、頂点をアップさせるといった形をとってきた傾向</li> <li>・秋田県のように県全体で指導方法が標準化されているものではないが、学校ごとに指導のあり方についての共通理解が図られ、統一されている</li> </ul>
<b>学習規律生活指導</b>	<p>○ 授業中の規律が遵守され、チャイム着席、教員や友達の話を最後まで静かに聞く態度、教員の指示に従う素直さ、毎時間の始業と終業の礼の徹底などが特徴的</p>	
	<p>(具体例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園や保育所の段階から、人の話を聞く姿勢や時間を守ることなどの集団生活に必要な基本的な態度をしっかりと学ばせている</li> <li>・全国学力・学習状況調査の結果、明らかとなった秋田の強み（生活習慣や学習習慣が定着していること等）を「秋田わか杉子 学びの十か条」としてまとめ、当たり前のことを根気強く積み重ねることの大切さを学校や児童生徒のみならず、保護者、地域等にも伝えている</li> </ul>	<p>(具体例)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導や、学習規律などについて、中学校区共通の指導基準で指導しており、指導のズレが生じない。当たり前のレベルが必然的に高くなる</li> <li>・時間の遵守が徹底されており、帰りの会の時間が学校で統一。部活動の終了時刻も統一</li> <li>・清掃の前後に黙想し、無言で清掃。清掃の最中、教員も無言で一緒に清掃。全員が雑巾を持って水拭きし、ほうきは使わない（無言清掃）</li> </ul>
<b>その他</b>	<p>○ 教育改革や教員の授業力向上の施策を県教育委員会のリーダーシップのもとに計画的に実施</p>	<p>○ 教員の授業力向上を市町村教育委員会や教員の自主的な研究組織、校長会などがリード</p>

(参考文献)

- ・教育ジャーナル (学研) 2014年12月号「福井県の学力の秘密を探るーその1」
- ・教育ジャーナル (学研) 2015年3月号「福井県の学力の秘密を探るーその2」
- ・教育ジャーナル (学研) 2015年7月号「福井県の学力の秘密を探るーその3」
- ・指導主事による校内研究活性化のための指導モデルの開発ーコーチングを活用して  
平成27年3月 国立教育政策研究所総括研究官 千々布敏弥
- ・「地域とともにある学校」の推進に向けた教育行政の在り方に関する調査研究<報告書>  
平成27年3月 研究代表者 尾崎春樹 (発行者 国立教育政策研究所)
- ・全国学力・学習状況調査において比較的良好な結果を示した教育委員会・学校等における教育施策・教育指導等の特徴に関する調査研究  
2011年3月31日 研究代表者 田中博之 (早稲田大学大学院教職研究科)
- ・月刊 教育情報誌「明日への学び」  
2015年1月21日 福井県教育委員会 福井県学力向上センター
- ・月刊 教育情報誌「明日への学び」  
2014年10月10日 福井県教育委員会 福井県学力向上センター
- ・「福井らしさ」について  
『「福井らしさ」を探る会 活動のまとめ』より

## 学力向上に成果をあげている県内の小中学校の学校組織マネジメント等の取組

1 校長のリーダーシップ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 学校教育に関する確固たる理念をもち、教職員にわかりやすく伝えている</li> <li>② 時代の流れを敏感に察知し、新たな情報や考え方を自校の取組に生かす柔軟性がある</li> <li>③ 学校の現状と課題を的確に把握し、その要因分析を行い、課題解決への道筋を明らかにして、教職員に示している</li> <li>④ 優しさと厳しさのバランスがとれている。教職員指導においても、そのような面が見られ、そこが教職員からの信頼につながっている</li> </ul>	
2 組織内のベクトル合わせ	3 教職員のチーム力の強化
<ul style="list-style-type: none"> <li>① 校長の意向が組織の中心的な教職員に理解され、同時に、指示・命令系統がはっきりしていることから、各部会が機能</li> <li>② 例えば、中学校においては、「タテ持ち」の教科経営により、学年の壁が取り払われ、また、教科内での協働体制が整備</li> <li>③ 課題を共有し、その解決のために、それぞれの教員が何をするのかを確認し、確実に実践（最後まで詰められている）</li> <li>④ 指導方法や授業の流れなどについて、学校全体で共通理解を図り、授業改善への組織的な取組を推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 授業の流れなど、決めたことは全員が実行</li> <li>② 課題をみんなで解決していくという気運があり、改善策などについて遠慮せず意見が出し合える環境</li> <li>③ 教員がそれぞれの役割に責任をもって行動</li> <li>④ 学力向上や授業づくりについての意識が高いレベルにあり、PDCA サイクルが機能</li> </ul>
	
<p><b>【組織的な仕組み】</b> (A小の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校長の考えを聞き、理解すると同時に、学校の課題を話し合う校長・教頭＋リーダー（主幹教諭・指導教諭・各主任）で構成される企画委員会を設置</li> <li>○ リーダーはその中で指示された内容を各学年（学年長）に下ろす</li> <li>○ 学年長は、各学年団教員に説明と指示を行う。その後、各学級では取り決めた事項を実施</li> <li>○ 各学級での実施状況を学年長及びリーダーが点検するなど、詰めを実施</li> </ul> <p>(B中の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 各組織（教務部、学校経営部、生徒活動部、管理部）が校長の考えを聞いたうえで、目標達成のための計画を作成</li> <li>○ 教頭を経由して校長に計画案を提出。校長が修正を行い、了解した時点で教職員に周知</li> <li>○ 校長の指示により、すべての学級ですべての教員が取り決め事項を推進。実施状況のチェックは組織の長と管理職が行い、詰めを実施</li> </ul>	<p><b>【組織的な仕組み】</b> (A小の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 毎年、客観的な成果が出ることにより、好循環が生まれている。また、教員の意識が高くなっている</li> <li>○ 自校の役割（教育課程拠点校）について、校長が組織の核となる教員に説明することで、自覚ができています</li> </ul> <p>(B中の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 校長が学力調査等の客観的なデータを示し、課題解決のために何をどうすべきかを教職員全体で確認</li> <li>○ 定期テストの集計をもって、校長と教科教員が面談を実施</li> <li>○ 授業力に差がある教員集団が子どもに確実に力を付けるために、外部講師の指導を受けながら授業スタイルを統一するなど、組織的な取組を推進</li> </ul> <p>(C中の場合)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 管理職とチームリーダーの会を適宜行うことで校長の考えが理解されるとともに、ミドルリーダーがよく育っている</li> <li>○ ワークショップ形式で納得するまで協議をし、出された意見を受け入れ改善に努めている</li> </ul>